令和６年度第２回仙台市協働まちづくり推進委員会　議事録

○日　　時：令和６年10月23日（水）15：00～17：00
○場　　所：仙台市役所本庁舎８階　第２委員会室
○出席委員：高浦康有委員長、岩間友希副委員長、飯田有紀子委員、加藤隆委員、神尾真大郎委員、小林幸司委員、傳野貞雄委員、春由美委員
○事務局　：市民局次長兼市民活躍推進部長、市民協働推進課長、地域政策課長、市民活動推進係長、連携推進係長、他担当職員

○次第
１　開　会
２　議　事
（１）市民活動や協働によるまちづくりに関する意識調査の実施について
（２）若者が活躍するまちづくり事業における令和６年度進捗状況及び課題と工夫について
　　ゲストスピーカー：
　　東北学院大学情報学部データサイエンス学科２年　浅野圭亮さん
３　その他
４　閉　会

○会議内容

1　開会

［事務局（市民活動推進係長）］

・委員12名中、本日は８名が参加。出席が過半数を超えており、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第４条第２項の規定に基づき、会議は成立する。

・以降の進行は高浦委員長にお願いしたい。

［高浦委員長］

・議事録署名人については、出席者の中から五十音順で指名したい。今回は岩間副委員長にお願いしたい。

（岩間副委員長　了承）

2　議事

（１）市民活動や協働によるまちづくりに関する意識調査の実施について

[事務局（市民協働推進課長）]

・資料１－１、１－２に基づき説明

［飯田委員］

・第１回の委員会の議論の中でも挙がっていた「まちづくり活動の第一歩のハードルをいかに下げられるか」といった議論にも関連するのだが、まちづくり活動の経験がない人とか、関心がある人たちに、実際に仙台市の事業に参加した人がどんな影響、いいことがあったのかを聞けると、そういった人たちの背中を押せることに繋がるのではないか。

・事業参加者に対し、追加で定性的にインタビューするのもいいのではないか。

[事務局（市民協働推進課長）]

・活動に参加することで出てくるマイナス面だけでなく、参加したことで得られるプラスの面をより伸ばしていくという意味でも、それについて問うのは必要だと思う。設問の追加を検討していく。

・自由記述欄もあるので、こちらで定性的な意見は把握していきたいと思っている。

［岩間副委員長］

・回答するにあたって予め本調査が次期協働まちづくり推進プランの検討の基本資料になるといった、前提条件の説明の記載はどこかにあるものか。

・私は町内会のメンバーと接する機会がよくあるが、彼らの中でもこれを目的としている

人が一定数いることから、問 11 の選択肢に「ネットワークづくり」のような項目を追加したらいかがか。例えば、有事の時に誰に頼ればよいかわからないといった問題も、町内会で活動していることで解決に繋がっている事例もちらほら聞く。
・また、問 20 について、「若者が…」と設問に記載があるが、予め若者とはどの年齢層を指すのか等の定義を記載した方が回答しやすくてよいのではないか。

[事務局（市民協働推進課長）]
・調査の趣旨については、今回資料として提出はしていないが、記載した添書をつける想定である。
・問 11 については選択肢の追加を、問 20 については若者の定義についても記載を入れようと思う。

[高浦委員長]
・問 18 では一般的な情報収集の際どういった媒体を用いているかという設問になっている事に対し、問 19 は仙台市の市政情報についての情報収集の方法を伺う設問となっているが、これまで他の設問では地域団体や市民活動団体に関する設問が続いているなかで、問 19 であえて市政情報の収集方法を尋ねていることに何か意図があるのか。問 18, 19 で、収集する情報の種類による差分をとりたいというものなのか。
・問 14 について、「活動している団体」という記載について、複数の団体に所属して活動をしている人だとどの団体を想定して回答すればよいか迷う可能性があるため、例えば、主に活動の時間を割いている団体、というように答えやすい表現にするとよいのではないか。

[事務局（市民協働推進課長）]
・問 18, 19 についてはお見込みの通り、日常的に何かを調べる場合と市の発信する情報を調べる場合との使用媒体の差分を測りたいという趣旨で設問を想定したものだが、ご意見の通り市政情報という枠組みではかなり大仰な表現でもあるため、事務局で改めて検討させて頂きたい。
・問 14 についてはご意見のとおり、なるべく迷われないように回答いただくことが必要かと思うため、表現を工夫してまいりたい。

[小林委員]
・市政モニターは必ずしも全員がまちづくり活動をしている方ばかりではないと思うので、そういった方のためにも、今までの活動事例だとか仙台市の協働事例を例示として挙げるのはいかがか。

［高浦委員長］

・確かに、2ページ目に市民活動の定義の掲載はあるものの、これだけだとイメージが湧きづらいのではないかと思う。

・令和4年度に若者に関する意識調査を仙台市で行った際、市民活動の例示を示すイラストを作成していたと記憶しているので、それの活用も良いかもしれない。

［事務局（市民協働推進課長）］

・ご意見の通り、「市民活動」というと漠然としたイメージを抱かれ、現状のままだと具体的に想像することができぬまま回答され得ることかと思う。適切な事例を探すなど、参考となる情報を掲載できるよう工夫して参りたい。

［神尾委員］

・問6については、市政モニターという多様な立場から意見を募るという手法をとるならば、問10、11の個人に伺う設問と同じようにもう少し気軽に活動に参画している選択肢を追加してみてはいかがか。

・問6に関連して、問10の設問を設けているかと思うが、活動へ参画する立場ごとに分野を問うのではなく、まず活動に参画をしている（いた）分野を問いたうえでその立場を問うのでもよいのではないか。

［事務局（市民協働推進課長）］

・運営者や役員等の立場を問う設問については、前回の調査との対比をとることを目的に設定したものだったため、分野の細分化は考えていなかった。

・また、おっしゃるとおり現状の記載ぶりだと相当な上位層を指すように感じ得ることかと思う。当該設問は活動の担い手側の考えを問うことを目的としていたのだが、もう少しかみ砕いた表現を検討したい。

・問10、11においては、個人の活動の形態を調べることを目的として新設した。個人でも限定的な時間・短期間であれば関わっていきたいのか、腰を据えて活動に関わるのは負担でも、時間を区切ってであれば参加したいのか、などの意向を問いたい。そのため、その先どういった分野であれば関わりたいと感じるか、という点まで問うかについては事務局で改めて検討したいと思うが、現段階の想定としてはご説明した通りである。

・答える側の考え方に沿って回答してもらえるよう、流れなどを見直してまいりたい。

[加藤委員]
・問 15-2 で、協働で取り組んだ（取り組んでみたい）分野についての設問があり、そこに「まちづくり」という選択肢がある。環境を通したまちづくりや子どもを中心としたまちづくりなど、まちづくりも多岐にわたるため、ここでは何を指しているのか疑問に思った。

[高浦委員長]
・問 6-2 にも同様の選択肢があることから、こちらにも関係するかと思う。本意識調査そのものが協働まちづくりに関するものを指していることから、より狭義なものを指しているものと推測するが、いかがか。
・かっこ書きでもよいので、なんとなく「まちづくり」とは何なのかというイメージ喚起になるような表現が何かあると良いのかもしれない。

[春委員]
・まちづくり活動に長けている人こそそういった考えになるかもしれないが、一般的にそうでない人から見たら特に違和感を覚えない書きぶりなのではないかと思う。

[事務局（市民協働推進課長）]
・選択肢については前回の調査時のものをそのまま使用している関係から、「まちづくり」という記載を準用しているが、必ずしも完全一致である必要はないかと思うので、改めて選択肢の見せ方については検討し直したいと思う。

（２）若者が活躍するまちづくり事業における令和６年度進捗状況及び課題と工夫について

[事務局（市民協働推進課長）]
・資料２－１に基づき説明

[ゲストスピーカー　浅野さん]
・資料２－２に基づき説明

[高浦委員長]
・（浅野さんのプレゼンを受け）まちづくりの担い手として、コロナ禍以降 SNS などを用いたオンラインの繋がりづくりが多くなっているが、それだけでなく実際に場所を設けてアクションを起こしている活動力に非常に脱帽した。

[飯田委員]
・「若者が活躍するまちづくり事業」に関する資料を拝見すると、仙台市の各部署でかなりの数の若者関連事業が実施されていることかと思う。各区・課の事業でアプローチしたい相手は一緒だったりするにも関わらず、それぞれが個別に一からアプローチするのは大変な作業なのではないか。
・各区・課の事業に参加した人たちの情報をデータベース化して部署を跨いで共有できるともっと楽なのではないだろうか。
・先ほど部署を超えての意見交換の機会があったと話があったが、このあたりの意見は出たりしなかったのかも併せてお聞きしたい。

[事務局（市民協働推進課長）]
・現状、若者関連事業をもつ他の部署から当課への問い合わせに対し、個別に紹介することはあるが、そういったデータベースが公式にあるわけではない。
・「若者が活躍するまちづくり事業」自体が令和２年度から始まった事業ということもあり、この事業そのものの立ち位置や方向性は次期プランの策定とともに今後打ち出していく必要があると考えている。それにあわせて、ご意見のあったような庁内への情報共有や庁内連携などの仕組みづくりができたらよいと考えている。

[飯田委員]
・仙台市の取り組みの良いところが、若者の定義に学生だけでなく若手社会人も含めて考えているところにあると思う。
・一言で若者といっても小学生なら町内会や教育委員会、大学生なら大学教授などの窓口になど、アプローチの相手先が定まっているかと思うが、若手社会人へのアプローチは

一体どのように行っているのか、お伺いしたい。

[事務局（市民協働推進課長）]
・若手社会人をどう取り組んでいくかという点については、正直なところ当課でも課題だと感じている。
・仙台まちづくり若者ラボ（以下、「若者ラボ」）は幸い半数ほどが社会人の参加になっているが、それも事業をもともと知っている人にアプローチができているからこそ参加に繋げられていることも多く、そもそも事業を知らない人は知らないという状況には変わりないかと思う。
・そもそも若手社会人が積極的に活動したり、団体を立ち上げたりできるのか、という点では難しいかもしれないにしても、ひとつ前の議事の市民意識調査でも取り上げたように、まずはきっかけとしてプロボノ的に活動してみて、市民活動の担い手側に移り行くことができる仕組みづくりが必要かと考えている。
・その仕組みづくりについては、経済局でも若者支援として育成なども行っているところだったので、それら部署からの情報収集も行いながら、アプローチの仕方を考えていきたい。

[高浦委員長]
・神尾委員は自身の立場から、若者や社会人層との関わりが多くあることかと思うが、いかがか。

[神尾委員]
・若手の参画促進はなかなか難しいことかと思う。
・しかし、経済産業省と復興創生や東北地方の中小企業支援といった関係でプロボノ事業をやらせていただいた経験があるが、若手社会人からのプロボノ事業への需要は非常に高いものと感じている。
・その要因として、学生時代仙台で過ごしていた人が就職のタイミングで一つの選択として首都圏に出てきたけれども、どうにか仙台や東北、もしくは自分の東北に関わることはできないかという思いをベースに、プロボノとして参画するようなケースも多かったように認識している。
・これをきっかけに、今度はその参加者が友人に声掛けをして口コミによって翌年のプロボノプロジェクトに参加するとか、そういった形で輪が広がっていたのを体感した経験がある。
・そういう意味では、学生向けのインターンのようなプロボノは、若手社会人のニーズをくすぐる取組のひとつであると思う。自分も若者ラボで2年間メンターを務めているところだが、社会人が学生と一緒に交じって活動をすることで、学生のキラキラした心を

取り戻すような感覚があり、学生・社会人双方に効果や意味があるように感じる。

[春委員]
・若者事業の課題のなかで、広報について人が集まらないという話もあったが、個人的には若者ラボの参加者40名というのは非常に集まっている方だと感じる。
・私が所属している社会福祉協議会でも、大学や教育委員会を通じて広報に努めているものの、なかなか情報が伝わりきらないのか、参加人数に伸び悩んでいる。どうしたらこの参加人数をキープできるのか、逆にノウハウがあれば教えて頂きたい。
・また、ゲストスピーカーの浅野さんの取り組みについて、参加者の募集方法について課題感を示されているお話があったが、子ども食堂に取り組まれている団体と連携をするのはいかがだろうか。取り組みの内容自体には関心があっても距離的な問題で参加できない利用者にアプローチするためにも、地域で一定の人数が参加している子ども食堂とコラボすることで、チラシを配架してもらうとかできるので、その際は声かけてもらえればと思う。

[事務局（市民協働推進課長）]
・若者ラボの参加者集めについては、担当職員が地道に行っているところである。大学の先生に個別にアプローチしたり、若者事業を紹介してほしいと大学にお呼びいただくことがあるので、そこで参加者が出てきたりなど、個別の関係を通じて参加者を募るケースが多い。
・一方で、参加した経験のある人の口コミで参加したという参加者も見かけるようになってきた。これまでの事業の経過から、一定程度の周知が浸透してきたように認識している。

[高浦委員長]
・浅野さん自身はどこで若者ラボを知るきっかけとなったのか？

[ゲストスピーカー　浅野さん]
・市民協働推進課職員よりメールをもらい、興味があったので参加した。

[小林委員]
・自分でも活動をしていて感じるが、若者の参加を促すのはかなり難しい。
・意識して人を集めようと思うとなかなか集まらないが、ひとり参加する人がいるとその後は人の繋がりのおかげか自然に参加の輪が広がっていく傾向がある。
・「若者が活躍するまちづくり事業」を通して「いい経験をした」と思った人が友人、後輩を連れてきたりしているものと推測するが、そんなOB・OGの繋がりなどはどのよう

になっているのか。

[事務局（市民協働推進課長）]
・若者ラボに参加した翌年度、翌々年度にはメンターとして参加したりだとか、また、数は多くはないもののラボでつくったチームで活動を始めたりするケースも見受けられる。

[高浦委員長]
・加藤委員の運営する長町マチキチでは、若者を主な構成員としたユースチームも組まれていると思うが、その運営状況はいかがだろうか。

[加藤委員]
・イベントを通しながら学生を集めていて、今年度最初に募集をかけて8名、最近また新しく入って14名となったところである。
・団体ではかなりの数、イベントを開催している。イベントをやるたび、そこに新しいメンバーを入れてみて、活動の参加を促してみている。毎回の参加というのは難しいが、少しずつでもいいから参加できるように心掛けて活動を行っている。ただ、もちろん毎回来てくれるわけではない。
・若者ラボのように、仮に全4回の開催であったとしても4回全て参加するのは非常に難しいと思う。1回休もうとも、とにかく来てもらうことを大切にしている。
・また、団体が長町をベースに活動しているという特性上、一度「長町ってこんなところ」という地域を知ってもらう機会を設けるようにしているが、そこで今回取り組んでいく課題を説明のうえ参加してもらうようにしている。
・説明を聞いた若者に何か付加できるものはないか提案をしてもらって、その提案を我々が形にしてあげる、という流れの活動にしている。

[岩間副委員長]
・「何人集まった」という集客の話も大切だが、これだけ多くの若者関連事業を通した結果どれだけの若者がその次のアクションをしたくなったのか、という点がより重要かと思う。
・市内の若者関連事業担当課間での連携も出てきたということなので、今後は区を跨いだ参加者の交流会のような機会があってもよいのではないか。例えば学校は青葉区だが住まいは若林区だとか、「自分の居住する区にも同様の活動の機会があるなら参加したい」と思う方は多いのではないかと思う。
・自身がみやぎの・まちづくり若手人材育成支援事業にコーディネーターとして参加していての感想として、若者たちのやりたいことを実現してあげたいと思えば思うほど、そ

れを受け入れられる団体がどこにいるのか、という情報は非常に重要だと感じている。
・もちろんコーディネーター自身がこれまでそれぞれ繋がってきた人脈はあるが、広い区の中でコーディネーターがまだ出会ってない団体の情報も必ずあるはず。
・区内のそういった情報をまんべんなく持っているのが区のまちづくり推進課であるはずで、「この区にはこういう団体がいるはずだ」という情報を共有できるデータベースをつくり、それが区を跨いで共有できる環境にできると、まちづくりに参加する若者にとって良い効果を発揮するのではないかと思う。

［高浦委員長］
・当初は区の単位で各区まちづくり推進課所管事業での活動をしていて、次のステップとして区の単位を跨いだユースチャレンジ！コラボプロジェクトでの活動を試みる団体もいるようなので、それらの流れを作っていくためにも岩間副委員長の発言されていたような取り組みは大切だと思う。

[事務局（市民協働推進課長）]
・ご意見の通りと拝聴した。若者団体単独での活動もありうるとは思いつつ、若者がどこか他の団体と繋がりたいとなったとき、その繋がり先としてどこと繋がり得るのかが見えにくいのが現状である。
・また、本市ではこれまでそういった情報発信をしてきていないが、区をまたいで活動したい若者団体がいる一方で、逆に若者側の助けを得たい団体や人もいるはずだ。それらのマッチングを行っていくのも、活動を盛んにしていくために必要な手法かと思う。
・庁内の若者関連事業担当課間との情報交換や連携については、今年度から本格化した取り組みでもあることから、今後より担当課との意見交換を重ねていきながら、若者関連事業の施策を進めていきたいと考えている。

［飯田委員］
・先ほどの岩間副委員長の発言に共感している。
・私自身はONE TOHOKU HUBとしても活動しているが、最近自分も情報の可視化の重要性に気付いたところだ。アナログかもしれないが、日頃関わりがある人や思い浮かんだ人を一覧表にして情報の可視化をしてみると、「あ、このことってあの人と繋がりがあったよね」なんて気づきが得られたりする。
・当委員会ではまちづくりに関するいろいろな人が集まっていて、この場であればそれぞれかなりの人との繋がりがあるものかと思う。せっかくこういった多様な知見を持った人が集まっている環境が整っているのだから、我々委員のそれぞれの人脈を活かしてできることがないかと考えていたところだ。

[傳野委員]
・私自身は泉区に住んでおり、近所に宮城大学がある。これは自分が町内会長であり、またあちらからアプローチをかけてきてくれたという事例にはなるが、宮城大学のゼミで活動している学生たちが「地域住民と交流をするにはお祭りが一番だと思うので、その手伝いをやらせてください」と、家を訪ねてくれた。
・彼らは防災訓練等にも積極的に携わってくれ、宮城大学には看護学部もあるが、その学生たちもチームの一員として参加してくれたので、大変助かった。
・学生たちは来年から後輩に取り組みを繋いでくれるようだ。こちらとしては反対する理由はないし、地元にある大学なので、今後も連携を深めていきたいと思っている。

[神尾委員]
・ゲストスピーカーの浅野さんの話にもあったが、何かひとつきっかけがあると、その後は市の職員からの紹介など、繋がりが生じて情報も得られやすくなるのかと思う。
・ただ、一般的にゼロから市に関わり始めることはハードルが高いかと思う。
・仙台市でもいろいろな部局で情報発信をしてはいるものの、それらは学生からみてどのような見え方になっているのか、是非お聞きしたい。

[ゲストスピーカー　浅野さん]
・自団体では1年生だけで40名程いるが、市の事業への参加経験や関わった経験はないという人がかなり多い。
・個人としては、メンバーが団体内の活動で終わらないよう、仙台若者SDGsアワードの交流会など、地域の方々と関わりを持てるよう参加を促してみたりしている。
・学生自身も活動に参加したいという人はいると思うが、興味がないとなかなか若者は仙台市ホームページを見ることは少ないと思う。TikTokのように、若者がラフに見ることができるコンテンツだと、自然と目に入ってくるのかと思う。

[神尾委員]
・私自身も今大学に所属しているが、日々すごい量のメールが流れてくる。
・確かに、よほど興味が無ければその情報に飛びついてはいかないし、それこそTikTokのようなSNSを活用して何か目を引くようなコンテンツがないと、なかなか若者には届かないのかもしれない。何か手のつけやすいものから、活動の入口に参画できるような形ができるとよい。
・なお、資料2-1では「若者が活躍するまちづくり事業」に参加した感想としてよい感想ばかりを書いてくれていることかと思う。何か事業の改善点などあればご意見いただきたいが、いかがか。

［ゲストスピーカー　浅野さん］

・書いた意見は率直なもので、若者ラボに関しても、参加するメンバーがみな自主的に応募してきている人たちなので、やる気に溢れたメンバーと活動ができて良い経験ができた。

・先日行ったパンケーキづくりのイベントも、イベントの企画から実施まで１週間というスピード感で行えた。こういった活動の経験はなかったが、自分と同じような人でも気軽に参加できるということをもっと外に発信していけるとよいと思った。

・ひとつ要望としてあるのは、我々は経験が全くないので、「こういうやり方がある」「これなら現実的にできる」など、自分たちの活動に何か提案をしてもらえると嬉しい。

3　その他

［高浦委員長］

・では、最後に「３．その他」について、事務局からは特にないようだが、皆さんから何かあるか。

（特になし）

［事務局（市民活動推進係長）］

・本日の委員会はこれにて終了とさせていただく。

―了―

〈議事録署名人〉

［委員長］高浦康有

［署名人］岩間友希